

2024 年度

卒業生・修了生および就職先からのアンケート調査報告書

2025 年 3 月

宮崎大学工学部・工学研究科

卒業生・修了生および就職先からのアンケート調査結果公表にあたって

工学部長・工学研究科長 鈴木 祥広

宮崎大学工学部では、教育の質的向上を目指して、「ディプロマポリシーの修得度、有用度に関するアンケート調査」を、以下の 2 つの回答対象に依頼して、定期的の実施しています。

A) 卒業生・修了生に対してのアンケート調査（毎年）

ディプロマポリシーとして掲げている各種能力を、工学部卒業・修了時にどの程度身につけたと感じているか(修得度)、および、その能力が社会人になった後どの程度役立っているか(有用度)について調査

B) 就職先に対してのアンケート調査（3 年に 1 度程度）

ディプロマポリシーとして掲げている各種能力を、自社に就職した卒業生・修了生がどの程度身につけていると感じているかについて調査

本報告書では、2020 年度卒業生(2021 年 3 月卒業生)を対象に、上記 A)のアンケート調査を実施し、「卒業生・修了生からのアンケート調査」の集計・分析結果を公表します。

宮崎大学工学部では、宮崎大学の使命の 1 つである「変動する時代、および、社会の多様な要請に応え得る人材の育成」を遂行するために、アンケート調査結果を今後の教育改善の推進に活かします。

最後になりましたが、本調査にご協力いただいた方々に、この場を借りて御礼申し上げます。

目次

【工学部】

●環境応用化学科	5
●社会環境システム工学科	8
●環境ロボティクス学科	11
●機械設計システム工学科	14
●電子物理工学科	17
●電気システム工学科	20
●情報システム工学科	23

【工学研究科】

●工学研究科全体	27
●環境応用化学分野	30
●社会環境システム工学分野	32
●環境ロボティクス分野	34
●機械設計システム工学分野	36
●電子物理工学分野	38
●電気システム工学分野	40
●情報システム工学分野	43

工学部

●環境応用化学科

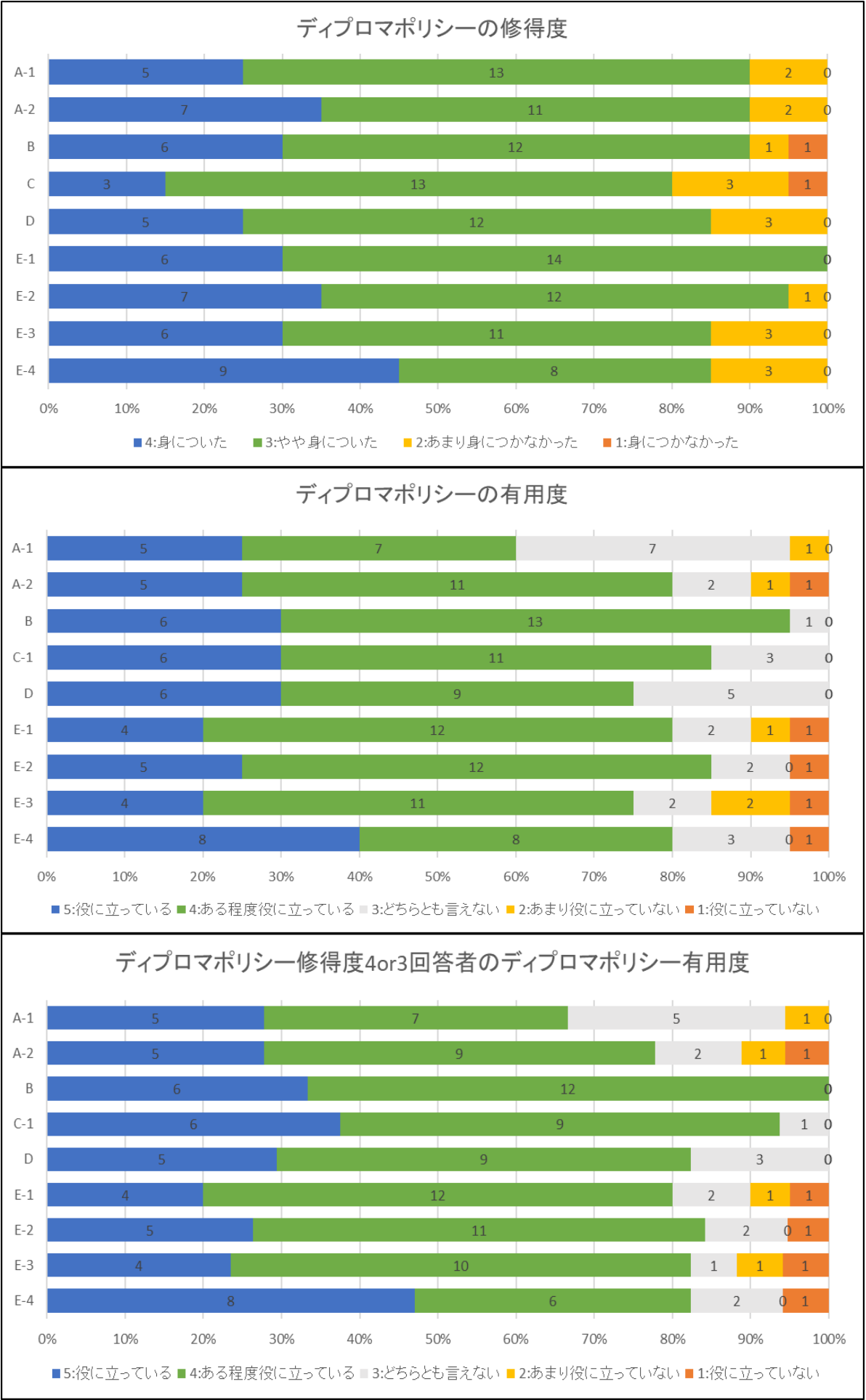
1. 環境応用化学科卒業生の業種別回答者数

業種 No	業種名	回答数	割合
2	食料品・飲料・たばこ・飼料製造業	1	5.0%
5	化学工業、石油・石炭製品製造業	4	20.0%
7	はん用・生産用・業務用機械器具製造業	1	5.0%
8	電子部品・デバイス・電子回路製造業	2	10.0%
9	電気・情報通信機械器具製造業	1	5.0%
11	その他の製造業	4	20.0%
12	電気・ガス・熱供給・水道業	2	10.0%
13	情報通信業	1	5.0%
22	国家公務員	1	5.0%
23	地方公務員	2	10.0%
24	その他	1	5.0%
Total		20	100%

2. 環境応用化学科のディプロマポリシー

A-1	自然、歴史、文化などの種々の我々を取り巻く環境を理解し、そこにおける自己を把握すると共に地球環境と調和した人類の発展を多面的に考えることができる。
A-2	社会への環境応用化学の役割と使命を理解し、応用化学を基礎とする技術者としての社会への貢献と責任について考えることができる。
B	変化に対応するための自主的、継続的な学習、および探求をすることができる。
C	日本語による論理的な記述力を中心とするコミュニケーション、および英語の読解ならびに基礎的なコミュニケーションをすることができる。
D	社会の要求の本質を理解して解決するデザインができ、環境、安全、経済性などの制約を考慮しながら計画的且つ柔軟に問題を解決することができる。さらに、チームで仕事を達成することを学ぶ。
E-1	数学、物理学、環境科学および情報科学に関する基礎知識とそれらを応用することができる。
E-2	物理化学、無機化学、有機化学、生物化学、化学工学、環境化学などの専門基礎知識を修得し、それらを応用することができる。
E-3	物理化学、無機化学、有機化学、生物化学、化学工学、環境化学などの応用化学に関する問題を解決することができる。
E-4	修得した実験技術に基づき実験を計画・遂行し、得られた結果をまとめ、説明し考察することができる。

3. 環境応用化学科卒業生のアンケート結果



4. 環境応用化学科のアンケート結果の評価

卒業生 20 名から回答があった。回答のあった業種は、化学工業、石油・石炭製品製造業を中心に 11 分野であり多様な分野で活躍しているのがわかる。卒業生のアンケート結果より、ディプロマポリシーの修得度は、すべての項目で「身についた」、「やや身についた」が 80%以上であり、自己評価が高い。ディプロマポリシーの有用度は、A-1 の「自然、歴史、文化などの種々の我々を取り巻く環境を理解し、そこにおける自己を把握すると共に地球環境と調和した人類の発展を多面的に考えることができる」は少し低い。しかし、それ以外の項目は「役に立っている」、「ある程度役に立っている」が 75%以上であり、卒業後に求められる能力を教育できていると判断できる。

以上の結果から、卒業生は、環境応用化学科が掲げたディプロマポリシーを身につけていると判断できる。

●社会環境システム工学科

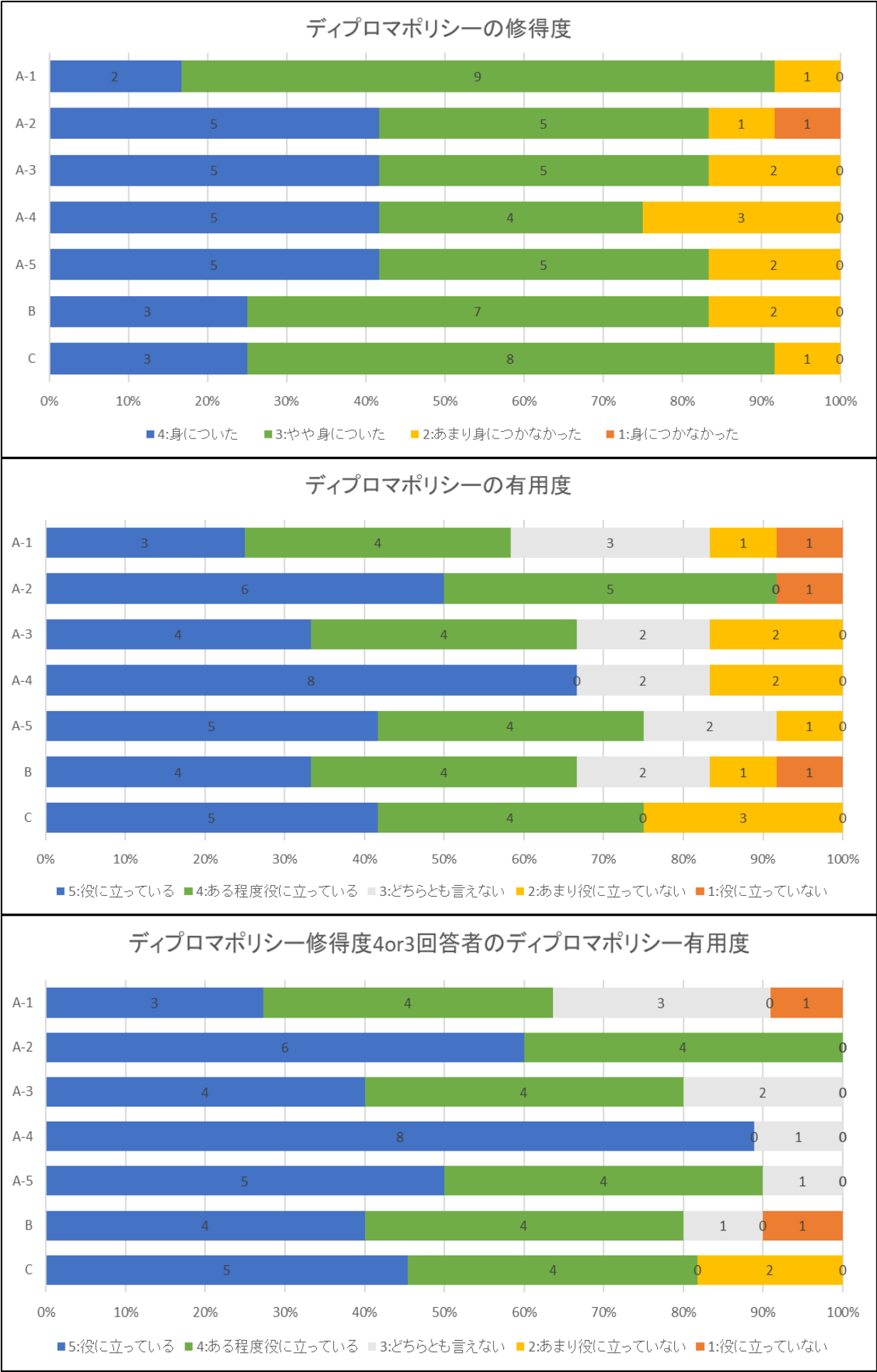
1. 社会環境システム工学科卒業生の業種別回答者数

業種 No	業種名	回答数	割合
1	建設業	4	33.3%
13	情報通信業	1	8.3%
20	その他の専門・技術サービス業(建設コンサルタントを含む)	2	16.7%
21	学校教育	2	16.7%
22	国家公務員	1	8.3%
23	地方公務員	2	16.7%
Total		12	100%

2. 社会環境システム工学科のディプロマポリシー

A-1	数学を含めた自然科学の知識：土木環境工学の技術者に必要となる専門知識を獲得する際に要求される数学、物理学などの基礎知識と情報処理技術に関する基礎知識を身につけている。
A-2	コミュニケーション能力：調査・実験・研究内容や成果について図表などを使って正確でわかりやすく記述、発表や質疑応答ができるとともに、専門分野に関する英語を理解・記述するための基礎的な能力を身につけている。
A-3	自己学習能力：土木環境工学の分野に興味を持ち、演習などを通じて自主的に学習する習慣を身につけている。
A-4	課題解決能力：土木環境工学の分野における課題の発見から解決にいたる手順や方策を計画・遂行できる能力を身につけている。また、調査や実験を計画・遂行し、結果を正確に解析して考察する一連のプロセスを体得している。また、チームで仕事をするための能力を身につけている。
A-5	技術者としての倫理：工学技術が社会や自然に及ぼす影響や効果を理解するとともに、公共の福祉の向上と環境保全を使命とする土木環境工学の技術者として必要な倫理・規範や責任を理解・判断できる能力を身につけている。
B	自然との調和を図りつつ生活・経済・文化・安全・地域を支える社会基盤を計画・設計・管理・評価する上で必要な、計画学系、建設材料工学系、構造工学系、地盤工学系、水理・水工学系、水処理・環境工学系の専門能力を身につけている。
C	現代の土木環境工学が直面している国内的、国際的問題を理解し、社会の技術者への要請を察知し、技術者のあるべき方向性を理解して適切な行動ができる能力を身につけている。

3. 社会環境システム工学科卒業生のアンケート結果



4. 社会環境システム工学科のアンケート結果の評価

卒業生 12 名から回答があった。回答のあった業種は、主に建設業、公務員、コンサルタントであり、おおむね本学科の就職先が反映されている。ディプロマポリシーの習得度は、A-4 以外はいずれの項目も「身についた」、「やや身についた」が 70%以上であり、問題はない。A-4 は課題解決能力の向上に関する習得度であり、やや低かった。ディプロマポリシーの有用度は、「身についた」、「やや身についた」の割合は 60～90%程度であった。特に A-1（数学を含めた自然科学の知識）の有用度が低い結果となった。土木や環境の分野は多岐にわたるため、就職先によってはあまり使われない知識があったことが理由として考えられた。特に、就職後 4 年目では、まだ包括的な業務に携わる機会が少ないため、大学で学んだ知識を十分に活かしてきれていない可能性がある。

以上より、卒業生は、おおむね本学科で教育した専門的内容は身についたと判断しており、ディプロマポリシーが役立つものとして認識されていた。今後も継続して本プログラムのポリシーに基づく教育を実践していくことが求められる。

●環境ロボティクス学科

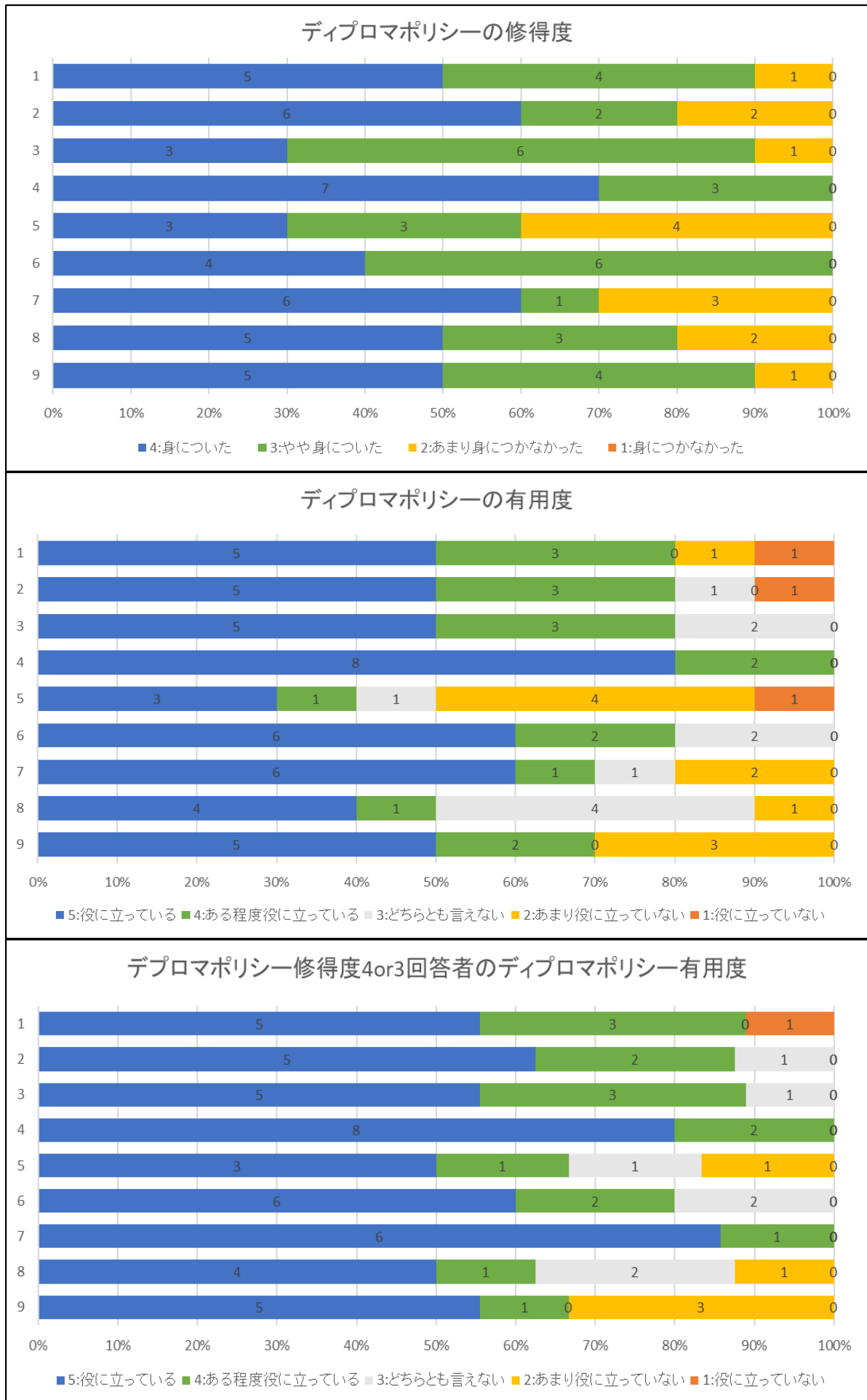
1. 環境ロボティクス学科卒業生の業種別回答者数

業種 No	業種名	回答数	割合
1	建設業	1	10.0%
8	電子部品・デバイス・電子回路製造業	2	20.0%
10	輸送用機械器具製造業	1	10.0%
13	情報通信業	2	20.0%
19	学術・開発研究機関	1	10.0%
20	その他の専門・技術サービス業(建設コンサルタントを含む)	1	10.0%
23	地方公務員	2	20.0%
Total		10	100%

2. 環境ロボティクス学科のディプロマポリシー

1	多面的視野：広い視野から多面的に物事を考えることができる。
2	倫理規範：社会における技術者の役割や使命を理解し、技術者として必要な倫理や規範を判断することができる。
3	チームワーク力：与えられた課題を達成する過程において、グループ討論を通じて得られるチームワーク力（リーダーシップ、協調性）を発揮できる。
4	自律性・継続性：課題や問題に対して、自律的、継続的に取り組むことができる。
5	言語リテラシー：相手に自分の考えを理解してもらえ外国語を含むコミュニケーションを実践できる。
6	情報リテラシー：多様な情報を収集し、数量的スキルに基づいて分析し、効果的に活用することができる。
7	工学デザイン能力：与えられた課題を達成する過程において、自ら問題を発見、整理、解決する基礎能力と工学デザイン能力を活用できる。
8	環境及び地域の理解：環境及び地域に関する知識を理解できる。
9	専門領域の基礎知識：数学、機械、電気電子、情報、化学などの専門領域の基礎知識を習得し、それを活用できる。

3. 環境ロボティクス学科卒業生のアンケート結果



4. 環境ロボティクス学科のアンケート結果の評価

卒業生のアンケート結果より、「自律性・継続性」は修得度、有用度がともに高いとの回答を得ている。一方、昨年度のアンケート結果では「チームワーク力」が高い評価であったが、今年度はそれに代わり「工学デザイン能力」が比較的高い評価となった。「チームワーク力」、「工学デザイン能力」は、卒業研究や環境ロボティクス演習 1 及び 2 において養われるものであり、これら学部関連科目の教育成果を示している。ディプロマポリシーの全体の中では、昨年度同様「言語リテラシー」が修得度、有用度に関しても低い評価であった。

本アンケートの回答職種は、「建設業」「電子部品・デバイス・電子回路製造業」「輸送用機械器具製造業」「情報通信業」「学術・開発研究機関」等であり、多様な分野へ卒業生が就職していることがわかる。このことは、環境ロボティクス学科の特徴である分野融合教育の成果であり、多様な分野へ工学系人材を輩出していることを示す実績である。

●機械設計システム工学科

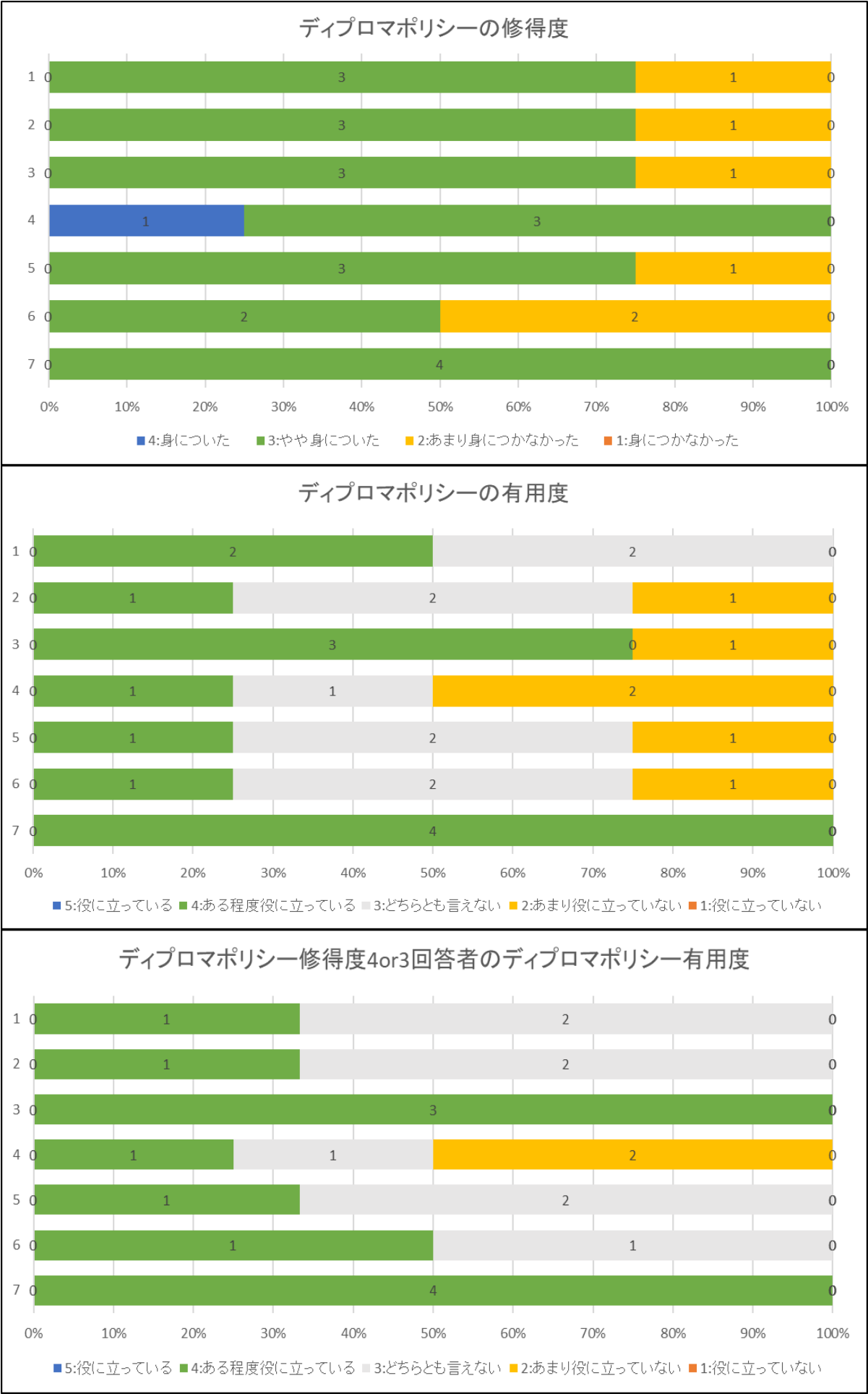
1. 機械設計システム工学科卒業生の業種別回答者数

業種 No	業種名	回答数	割合
10	輸送用機械器具製造業	3	75.0%
11	その他の製造業	1	25.0%
Total		4	100.0%

2. 機械設計システム工学科のディプロマポリシー

1	(P)社会の要求や制約に応えるため、自主的に計画して、それを継続的に実行できる。
2	(H)人と機械との共存や機械と自然との調和を考えることができる。
3	(O)社会秩序や自然環境保護に対する技術者の責務を考えることができる。
4	(E)機械技術者としての工学の基礎および専門的知識を有する。
5	(N)自然環境を維持するために、資源とエネルギーの有効利用を考えることができる。
6	(I)自分のアイデアを実現できるデザイン能力およびそれを説明するコミュニケーション能力を有する。
7	(X)得られた成果を吟味し、まとめることができる。

3. 機械設計システム工学科卒業生のアンケート結果



4. 機械設計システム工学科のアンケート結果の評価

1) 卒業生の業種から見た評価

回答数は多くないが、機械設計システム工学科の目指している業種に就職している。

2) ディプロマポリシーについて

卒業生が評価するディプロマポリシーの修得度については、概ね「やや身についた」との回答を得ている。有用度については、「(O)社会秩序や自然環境保護に対する技術者の責務を考えることができる。」と「(X)得られた成果を吟味し、まとめることができる。」において、ある程度役立っているとの回答を得ている一方、「(E)機械技術者としての工学の基礎および専門的知識を有する。」では、あまり役立っていないとの回答であった。回答者数を増やすことが今後の課題である。

●電子物理工学科

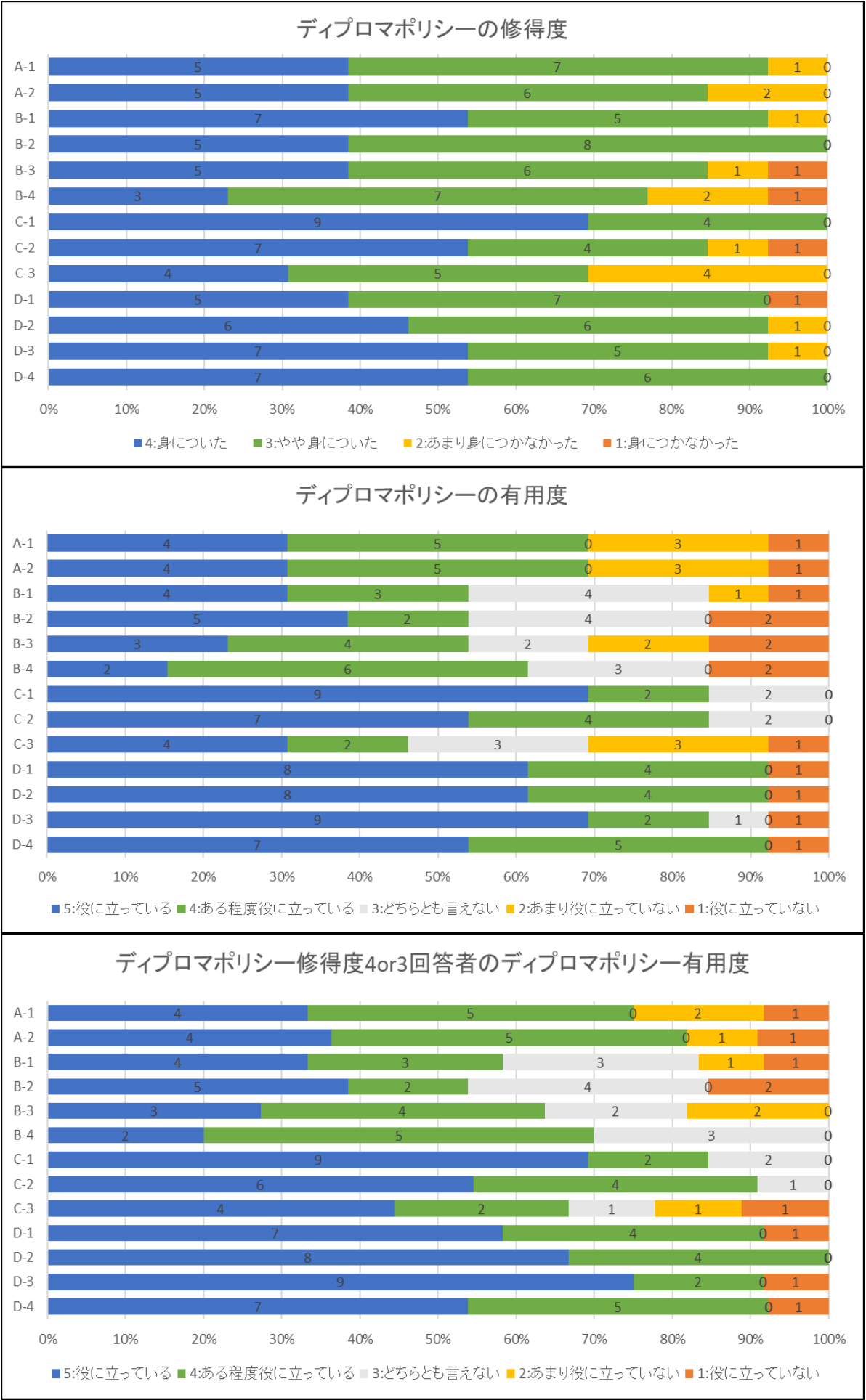
1. 電子物理工学科卒業生の業種別回答者数

業種 No	業種名	回答数	割合
6	鉄鋼業、非鉄金属・金属製品製造業	3	23.1%
8	電子部品・デバイス・電子回路製造業	4	30.8%
12	電気・ガス・熱供給・水道業	1	7.7%
23	地方公務員	2	15.4%
24	その他	3	23.1%
Total		13	100.0%

2. 電子物理工学科のディプロマポリシー

A-1	自然界や社会における問題を様々な立場から理解する能力を身につける。
A-2	社会における工学の役割や使命を理解し、技術者として必要な技術者倫理や情報倫理を身につける。
B-1	数学・物理学を中心とした工学基礎知識を習得する。
B-2	工学の基礎となる力学、電磁気学、物性物理学、量子力学、電気回路などに関する知識を習得する。
B-3	実験によって物理現象を確認するとともに、実験技法を修得する。
B-4	電子物性工学、物理計測工学に関わる基本原理を理解し、その応用能力を身につける。
C-1	自分の考えを論理的にまとめ、相手に文書やプレゼンテーションで正確に伝えると共に、相手の話している内容を理解する能力を身につける。
C-2	円滑な課題解決のためのチームワーク力を身につける。
C-3	工学的な内容について書かれた英語文献等を理解するための基礎的能力を身につける。
D-1	与えられた課題を達成する過程において、情報を収集、分析し自ら問題を発見し、その背後にある課題を見つけそれらを整理する能力を身につける。
D-2	課題を論理的に考察し、解決できる能力を身につけ、その結果をまとめることができる。
D-3	さまざまな条件を考慮して問題を解決するための仕組み(手順)を構築する能力を身につける。
D-4	自主的・継続的に課題に取り組む能力を身につける。

3. 電子物理工学科卒業生のアンケート結果



4. 電子物理工学科のアンケート結果の評価

1) 卒業生の業種から見た評価

合計 13 名からの回答があり、電子物理工学科の目指している業種に就職していると判断できる。

2) ディプロマポリシーについて

- ・修得度については、B-2（工学の基礎となる物理や電気に関する知識）、C-1（論理的に文書やプレゼンテーションで伝える能力）、D-4（自主的・継続的に取り組む能力）が身につけていたと判断できる。
- ・一方、C-3（英語文献等を理解するための基礎的能力）については身につけている割合が低かった。卒業研究を通して、英語文献を読む機会を増やす必要がある。
- ・有用度については、特に C-1,2 や D-1,2,3,4 が高く、コミュニケーション力や課題解決能力全般が社会に求められていると考えられる。
- ・B-2,B-3 のような工学の基礎となる科目や実験科目の有用度が低い点については、就職先での業務内容次第でこのような結果になったと思われる。

●電気システム工学科

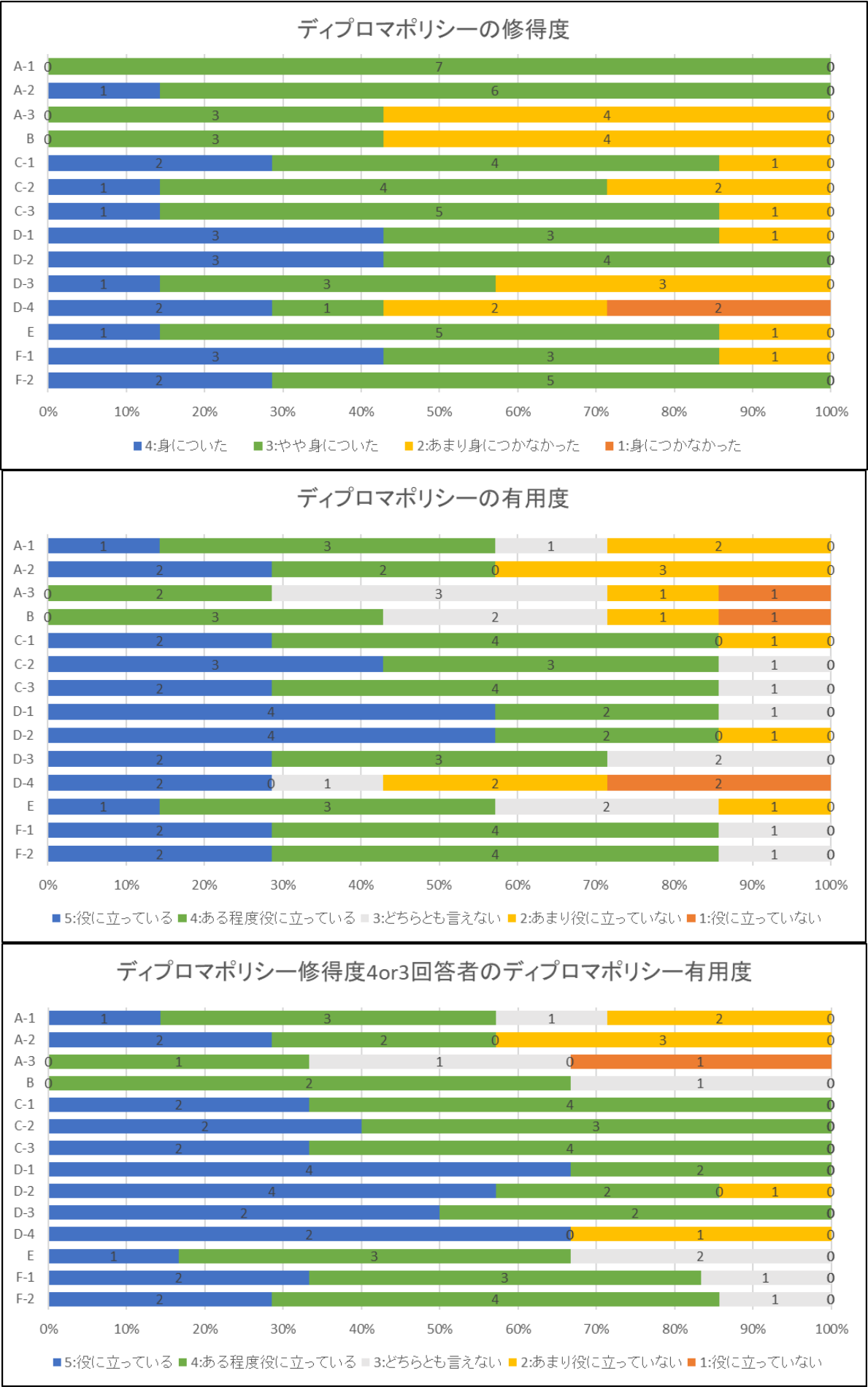
1. 電気システム工学科卒業生の業種別回答者数

業種 No	業種名	回答数	割合
1	建設業	1	14.3%
9	電気・情報通信機械器具製造業	1	14.3%
12	電気・ガス・熱供給・水道業	2	28.6%
13	情報通信業	1	14.3%
24	その他	2	28.6%
Total		7	100.0%

2. 電気システム工学科のディプロマポリシー

A-1	広い視野から多面的に物事を考える能力を身につける。
A-2	技術者にとって必要となる数学を含めた自然科学の知識を身につける。
A-3	専門基礎として電磁気学、電気回路などの知識を身につける。
B	電気エネルギーおよび情報通信分野に関する専門技術と実践能力を身につける。
C-1	問題を発見、整理する基礎能力を身につける。
C-2	チームで考察と議論ができる。
C-3	解決した問題点を総合的に考察できる能力を身につける。
D-1	日本語で論理的な記述ができる能力を身につける。
D-2	プレゼンテーションの技術を習得する。
D-3	内容を理解し、要点をまとめる能力を身につける。
D-4	英語の文献や資料を読み、理解できる能力を身につける。
E	技術者に求められる倫理観を身につける。
F-1	課題や問題に対して、自律的、継続的に取り組むことができる。
F-2	問題解決のために文献調査や整理する能力を身につける。

3. 電気システム工学科卒業生のアンケート結果



4. 電気システム工学科のアンケート結果の評価

1) 卒業生の業種から見た評価

学生は電気システム工学科の目指している分野に就職している。半導体作製企業、電気通信情報起業、電力会社、電気機器製造企業であるが、特に、電気・ガス・熱供給・水道業が多い。例年の傾向である。

2) ディプロマポリシーについて

ディプロマポリシーの修得度については、全ての項目について概ね身についている（「4身についている」と「3やや身についている」の合計）とする割合が高かった。特に、A項目が高く、電気エネルギー、電子回路、制御、情報、通信などの専門領域において幅広く物事を考える能力を身につけていると評価している。卒業研究の他、電気システム工学プロジェクト実験や電気システム工学課題演習において、課題探求及び課題解決能力を向上させる教育の成果がでているものとする。

一方、D-4の英語の文献や資料を読み、理解できる能力を身につける項目については、身につけなかったとの回答が寄せられている。これは毎年の傾向である。入学時から英語を苦手とする学生が多いことが大きな要因と思われるが、英語文献の読み合わせの時間を特別に設けるなどの工夫をしているものの大きな成果が得られていないと考える。

ディプロマポリシーの有用度においては、A項目の有用度が低い。大学では、広い視野から多面的に物事を考える能力を養わせているが、企業はやはり専門性を必要としている結果と考える。

以上の結果から、課題はあるものの、卒業生は電気システム工学科が掲げたディプロマポリシーを概ね身につけていると判断できる。

●情報システム工学科

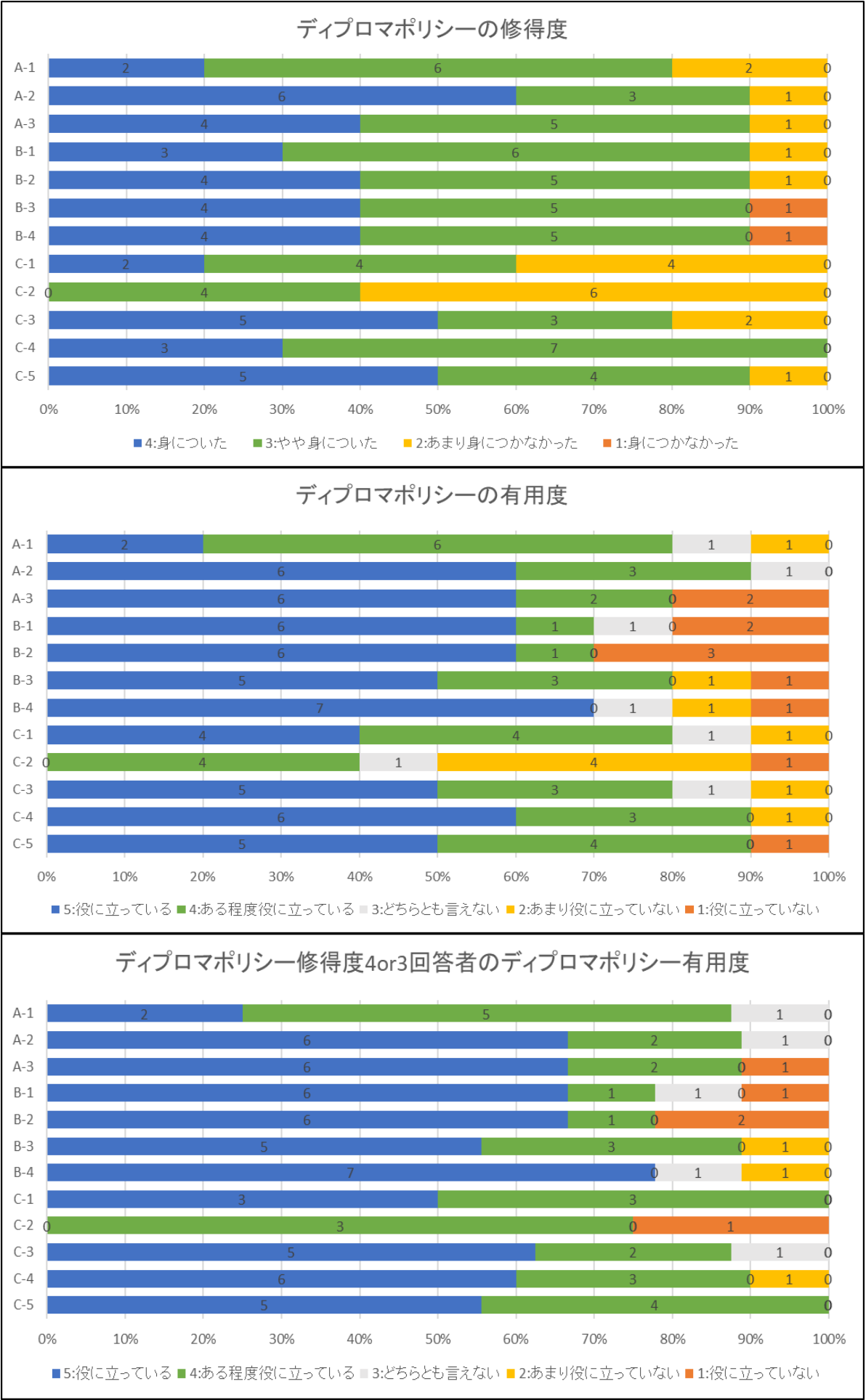
1. 情報システム工学科卒業生の業種別回答者数

業種 No	業種名	回答数	割合
8	電子部品・デバイス・電子回路製造業	1	10.0%
10	輸送用機械器具製造業	1	10.0%
13	情報通信業	6	60.0%
24	その他	2	20.0%
Total		10	100%

2. 情報システム工学科のディプロマポリシー

A-1	問題を環境、人間、文化、社会、地域、国際関係などの側面から多面的にとらえることができる。
A-2	工学技術者が社会に及ぼす影響や技術者としての倫理的責任を理解できる。
A-3	数学及び情報科学の理論の基礎を理解し、情報工学の様々な問題に応用することができる。
B-1	情報工学に必要な、数学及び情報科学の諸理論を習得し、それらを応用することができる。
B-2	計算機システムの構成や動作に関する知識を習得し、ソフトウェア開発に応用することができる。
B-3	問題を解決するために、既存のアプリケーションソフトを利用でき、かつ、自らプログラムを作成することができる。
B-4	問題を分析し、モデル化を行うとともに、プログラムをデザインし、実装し、評価することができる。
C-1	自分の考えを伝え相手の考えを理解するための、日本語による論理的な記述、プレゼンテーション及び討議を行うことができる。
C-2	英語による情報を理解し、基礎的なコミュニケーションを行うことができる。
C-3	情報技術の進化に対応していくために、主体的かつ継続的な学習の必要性を理解できる。
C-4	与えられた制約の下で課題を解決するために、計画的にその課題に取り組むことができる。
C-5	チームとして目標を共有し、コミュニケーションを図りつつ問題解決に取り組むことができる。

3. 情報システム工学科卒業生のアンケート結果



4. 情報システム工学科のアンケート結果の評価

1) 卒業生の業種から見た評価

卒業生 10 名からのアンケートに対する回答があった。そのうち 60%が、情報通信業で働いている卒業生からのものであった。半数以上の卒業生が情報システム工学科の目指している分野に就職をしていることから、学科のカリキュラム設計方針に問題はないと考えられる。

2) ディプロマポリシーについて

修得度については、C-2（英語によるコミュニケーション能力）を除くと、身につけている（「身についた」と「やや身についた」）とする割合が 60%以上あり、有用度も高いと回答している。

C-2 については半数以上の卒業生が「あまり身につかなかった」と回答し、有用度について約半数の卒業生が「あまり役に立っていない」または「役に立っていない」と回答している。ただし、C-2 の修得度の高い卒業生については、その有用度も「役に立っている」と答えている割合が高く、C-2 の能力を活用した仕事をしているものと考えられる。

以上から、現在の情報システム工学科のカリキュラム設計に概ね適切と考えられるが、英語によるコミュニケーション能力の向上が課題と考えられる。

工学研究科

●工学研究科全体

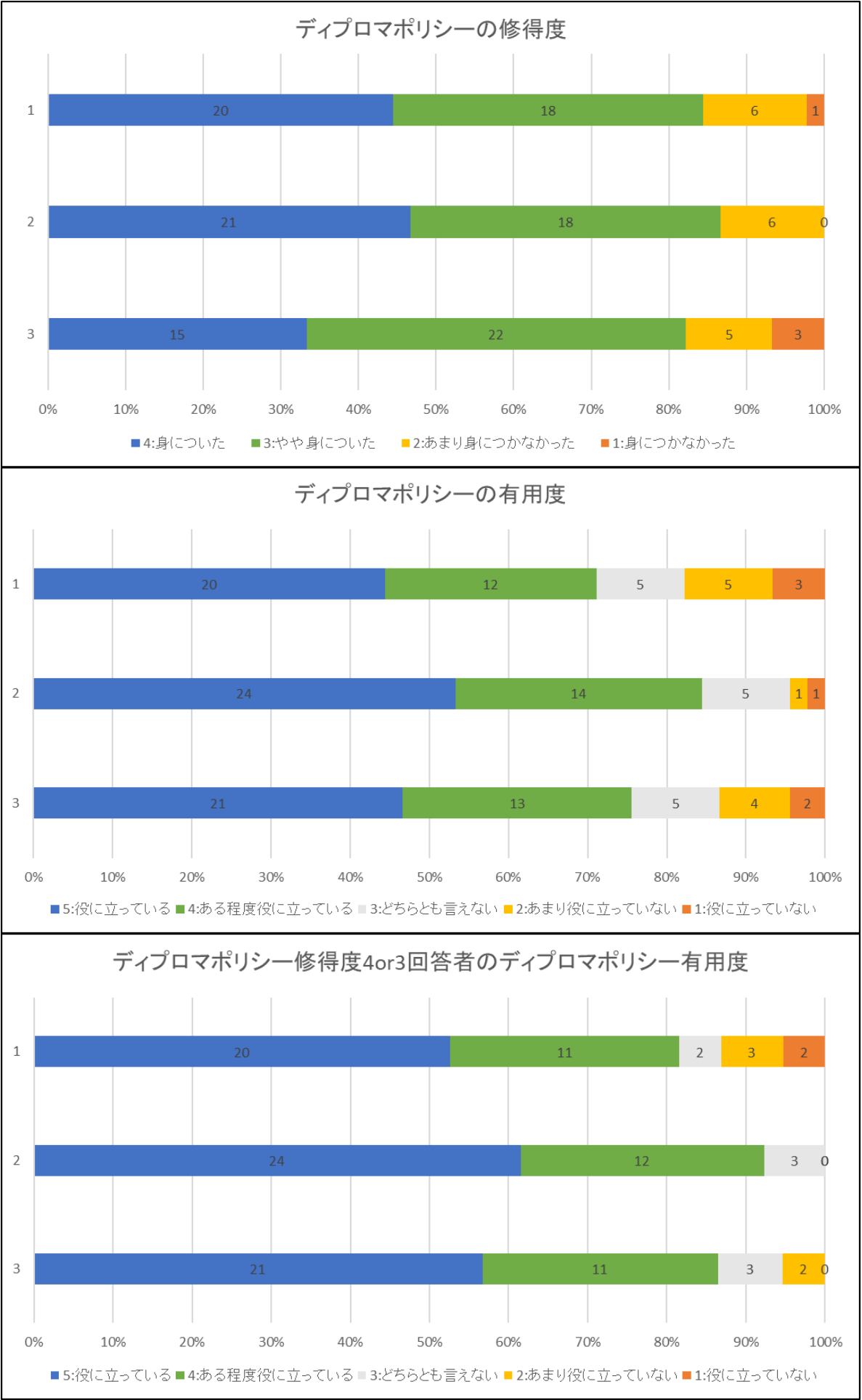
1. 工学研究科全体の修了生の業種別回答者数

業種 No	業種名	回答数	割合
1	建設業	3	6.7%
5	化学工業、石油・石炭製品製造業	4	8.9%
6	鉄鋼業、非鉄金属・金属製品製造業	2	4.4%
8	電子部品・デバイス・電子回路製造業	8	17.8%
9	電気・情報通信機械器具製造業	2	4.4%
10	輸送用機械器具製造業	2	4.4%
11	その他の製造業	4	8.9%
12	電気・ガス・熱供給・水道業	3	6.7%
13	情報通信業	7	15.6%
19	学術・開発研究機関	1	2.2%
20	その他の専門・技術サービス業(建設コンサルタントを含む)	3	6.7%
21	学校教育	2	4.4%
22	国家公務員	1	2.2%
23	地方公務員	1	2.2%
24	その他	2	4.4%
Total		45	100.0%

2. 工学研究科全体のディプロマポリシー

1	工学分野の高度専門知識を修得して応用できる能力
2	自ら課題を探究し、その解決に向けて高度専門知識を活用し主体的に考える能力
3	研究開発を通じて必要となる日本語や英語によるコミュニケーション能力

3. 工学研究科全体の修士生のアンケート結果



4. 工学研究科全体のアンケート結果の評価

昨年度の回答数が 43 件だったのに対して、今年度の回答数は 45 件であり、昨年度とほぼ同数の回答が得られた。業種別の回答者数は、1 番多いのが「電子部品・デバイス・電子回路製造業」で、2 番目が「情報通信業」、3 番目が「化学工業、石油・石炭製品製造業」であった。この分布は、回答が得られた分野に偏りがあるため、実際の就職先の分布とは異なる可能性があるものの、工学分野の幅広い業種で、本学修了生の活躍が期待できると言える。

ディプロマポリシーの修得度、および、有用度については、「1: 身につかなかった」「1: 役に立っていない」という回答が数件あるものの、修得度は、すべての項目でポジティブな回答が 80%を越えており、有用度は、すべての項目で、ポジティブな回答が 70%を超えていることから、工学研究科のディプロマポリシーに大きな問題はみられないと言える。

●環境応用化学分野

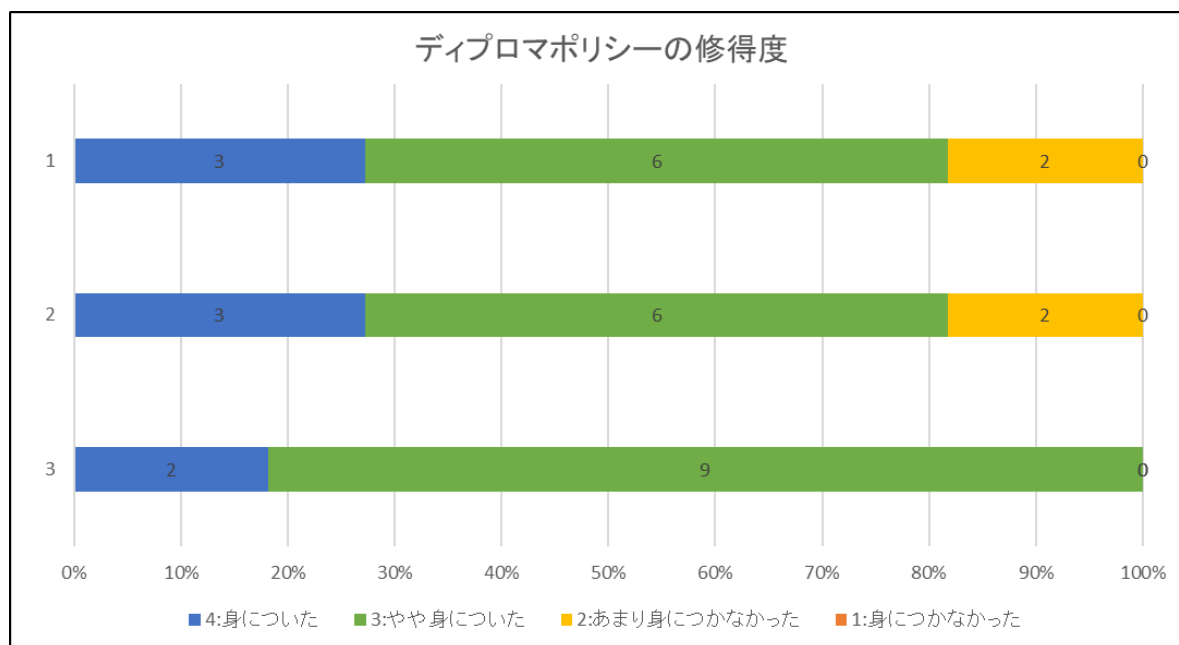
1. 環境応用化学分野修了生の業種別回答者数

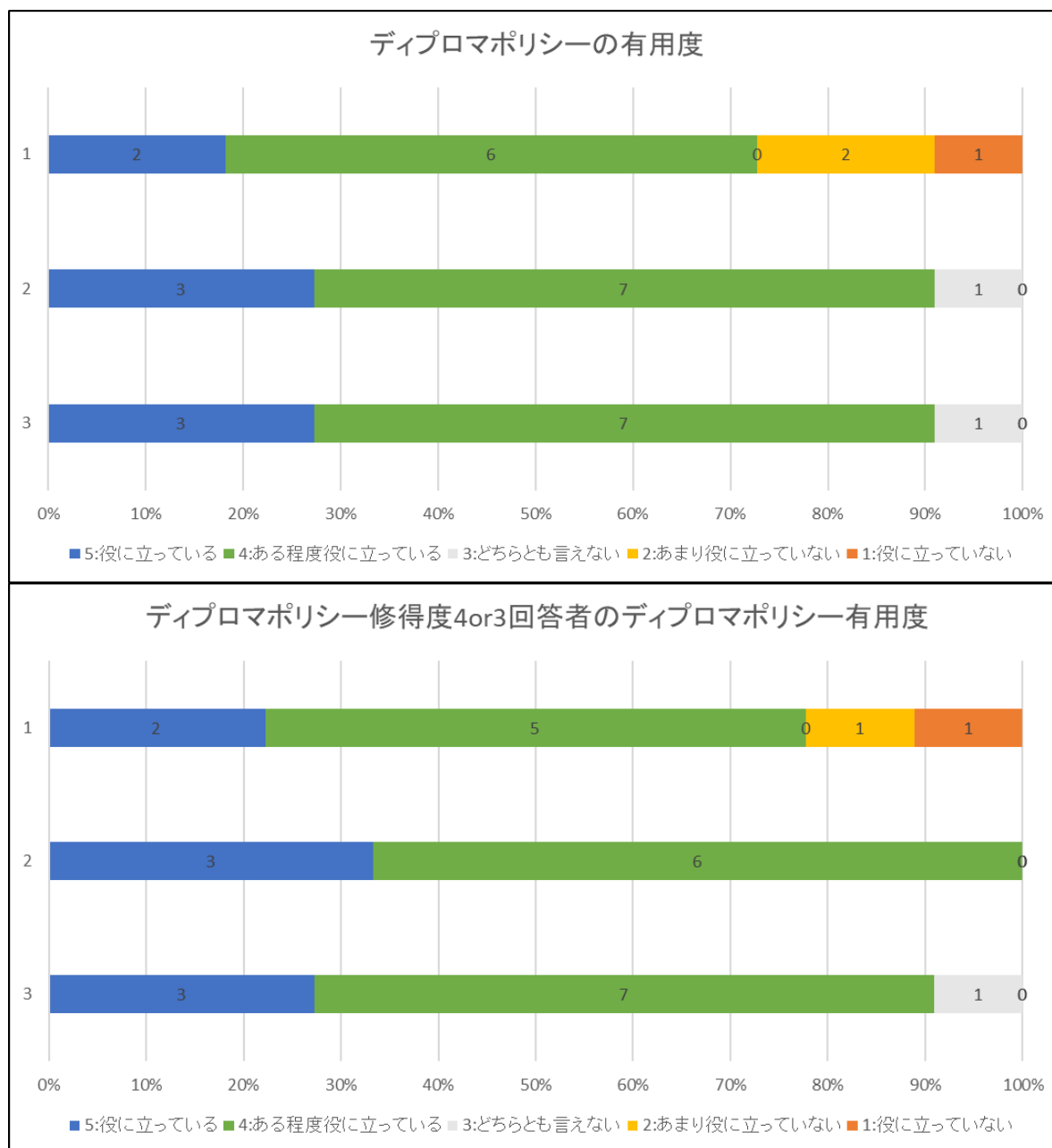
業種 No	業種名	回答数	割合
5	化学工業、石油・石炭製品製造業	4	36.4%
8	電子部品・デバイス・電子回路製造業	2	18.2%
9	電気・情報通信機械器具製造業	1	9.1%
11	その他の製造業	3	27.3%
22	国家公務員	1	9.1%
Total		11	100.0%

2. 工学研究科全体のディプロマポリシー

1	工学分野の高度専門知識を修得して応用できる能力
2	自ら課題を探究し、その解決に向けて高度専門知識を活用し主体的に考える能力
3	研究開発を通じて必要となる日本語や英語によるコミュニケーション能力

3. 環境応用化学分野修了生のアンケート結果





4. 環境応用化学分野のアンケート結果の評価

修了生 11 名から回答があった。回答のあった業種は、化学工業、石油・石炭製品製造業を中心に製造業がほとんどであり、学部卒に比べると専門的な分野で活躍しているのがわかる。修了生のアンケート結果より、ディプロマポリシーの修得度は、すべての項目で「身についた」、「やや身についた」が 80%以上であり、自己評価が高い。ディプロマポリシーの有用度は、1 の「自工学分野の高度専門知識を修得して応用できる能力」は少し低い、しかし、それ以外の項目は「役に立っている」、「ある程度役に立っている」が 90%以上であり、修了後に求められる能力を教育できていると判断できる。

以上の結果から、修了生は、環境応用化学分野が掲げたディプロマポリシーを身につけていると判断できる。

●社会環境システム工学分野

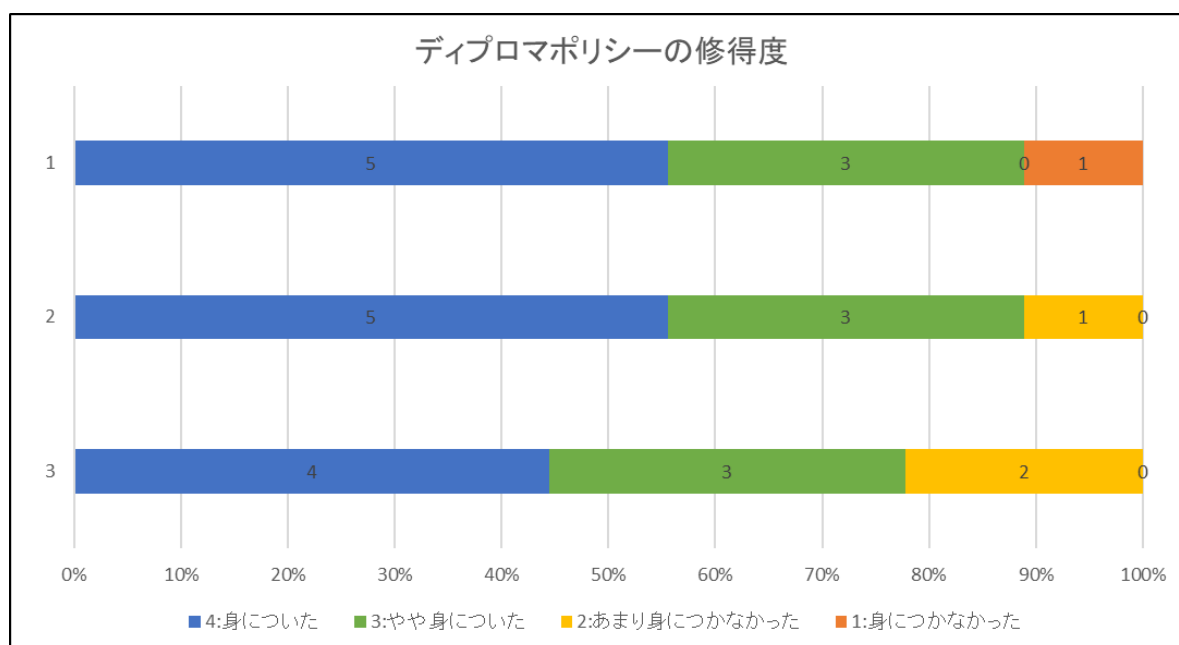
1. 社会環境システム工学分野修了生の業種別回答者数

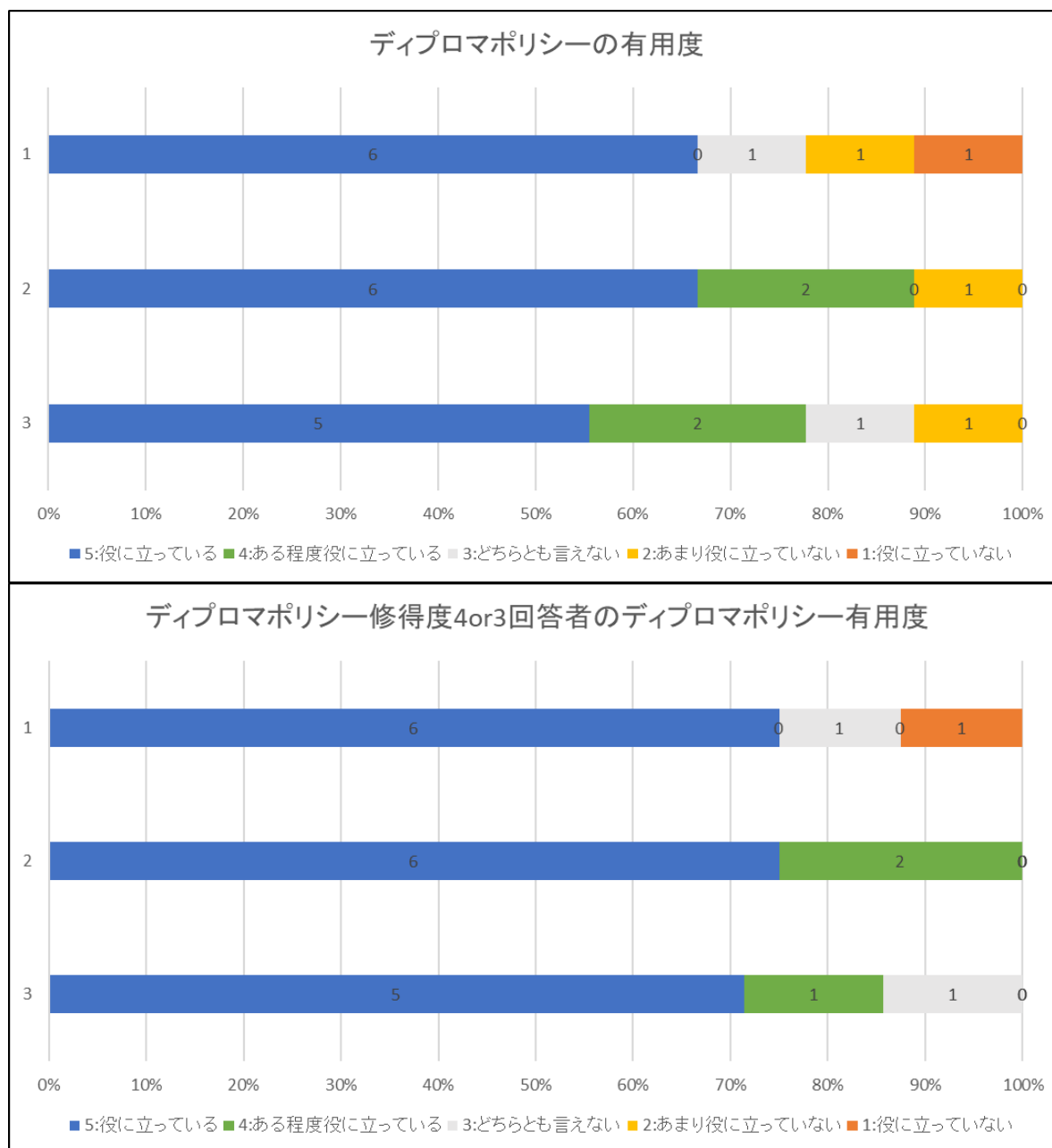
業種 No	業種名	回答数	割合
1	建設業	3	33.3%
13	情報通信業	1	11.1%
20	その他の専門・技術サービス業(建設コンサルタントを含む)	2	22.2%
21	学校教育	2	22.2%
23	地方公務員	1	11.1%
Total		9	100.0%

2. 工学研究科全体のディプロマポリシー

1	工学分野の高度専門知識を修得して応用できる能力
2	自ら課題を探究し、その解決に向けて高度専門知識を活用し主体的に考える能力
3	研究開発を通じて必要となる日本語や英語によるコミュニケーション能力

3. 社会環境システム工学分野修了生のアンケート結果





4. 社会環境システム工学分野のアンケート結果の評価

修了生 9 名から回答があった。ディプロマポリシーの修得度は、「身についた」、「やや身についた」と回答した割合が項目 1 および項目 2 で 90%程度、項目 3 でも 80%程度であり、いずれも問題はない。ディプロマポリシーの有用度は、「身についた」、「やや身についた」の割合は 60～90%程度であり概ね問題ないと考えられた。学部生と同様に、土木分野は内容が多岐にわたるため、就職 4 年目では十分に活用できていないと感じている修了生がある程度いることがうかがえた。以上より、設定されたディプロマポリシーの有用性はおおむね問題ないと判断できる。

●環境ロボティクス分野

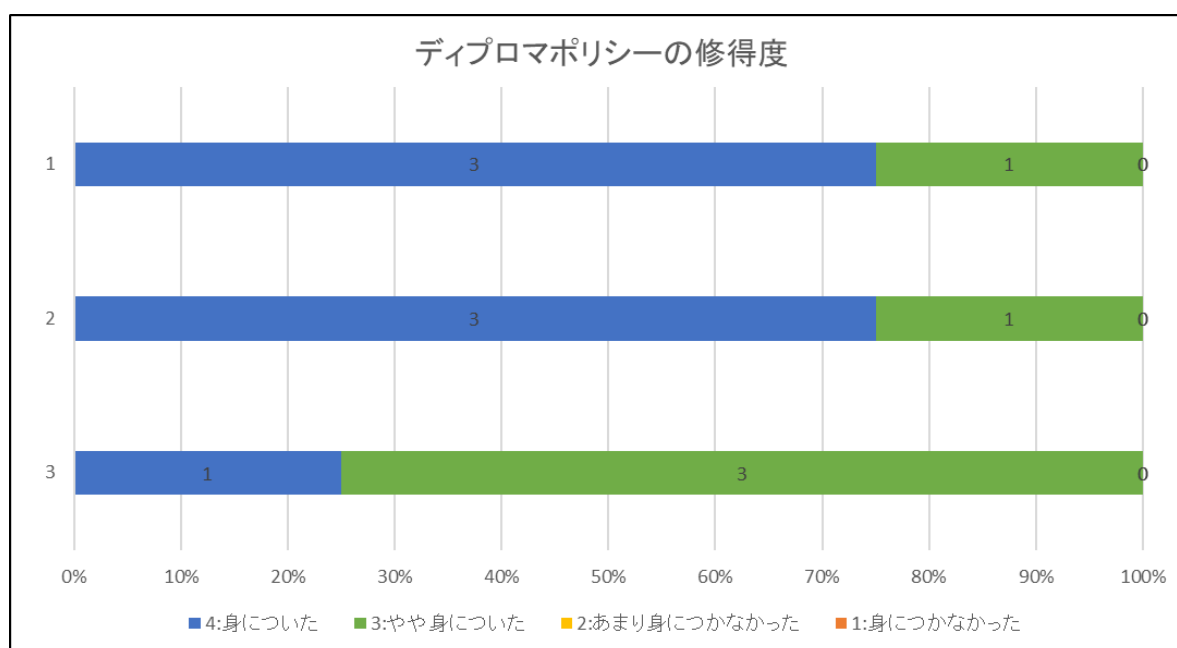
1. 環境ロボティクス分野修了生の業種別回答者数

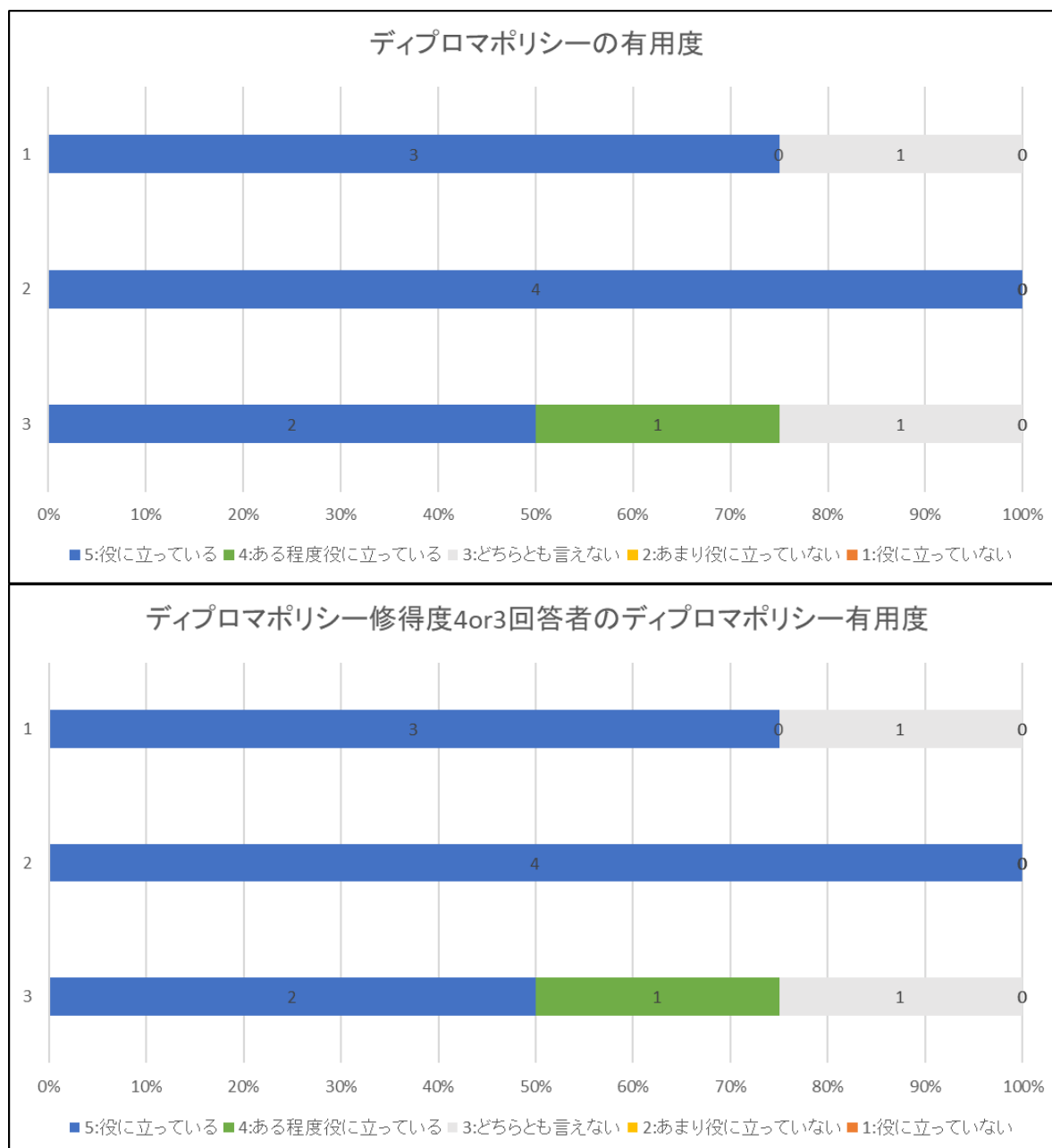
業種 No	業種名	回答数	割合
8	電子部品・デバイス・電子回路製造業	1	25.0%
13	情報通信業	1	25.0%
19	学術・開発研究機関	1	25.0%
20	その他の専門・技術サービス業(建設コンサルタントを含む)	1	25.0%
Total		4	100.0%

2. 工学研究科全体のディプロマポリシー

1	工学分野の高度専門知識を修得して応用できる能力
2	自ら課題を探究し、その解決に向けて高度専門知識を活用し主体的に考える能力
3	研究開発を通じて必要となる日本語や英語によるコミュニケーション能力

3. 環境ロボティクス分野修了生のアンケート結果





4. 環境ロボティクス分野のアンケート結果の評価

アンケート結果より、「研究開発を通じて必要となる日本語や英語によるコミュニケーション能力」の修得度が他のディプロマポリシーより低めではあるが、全体的に身についているとの評価を頂いた。これは、昨年度と同様の傾向である。本アンケートの回答職種から、多様な分野へ卒業生が就職していることがわかる。

●機械設計システム工学分野

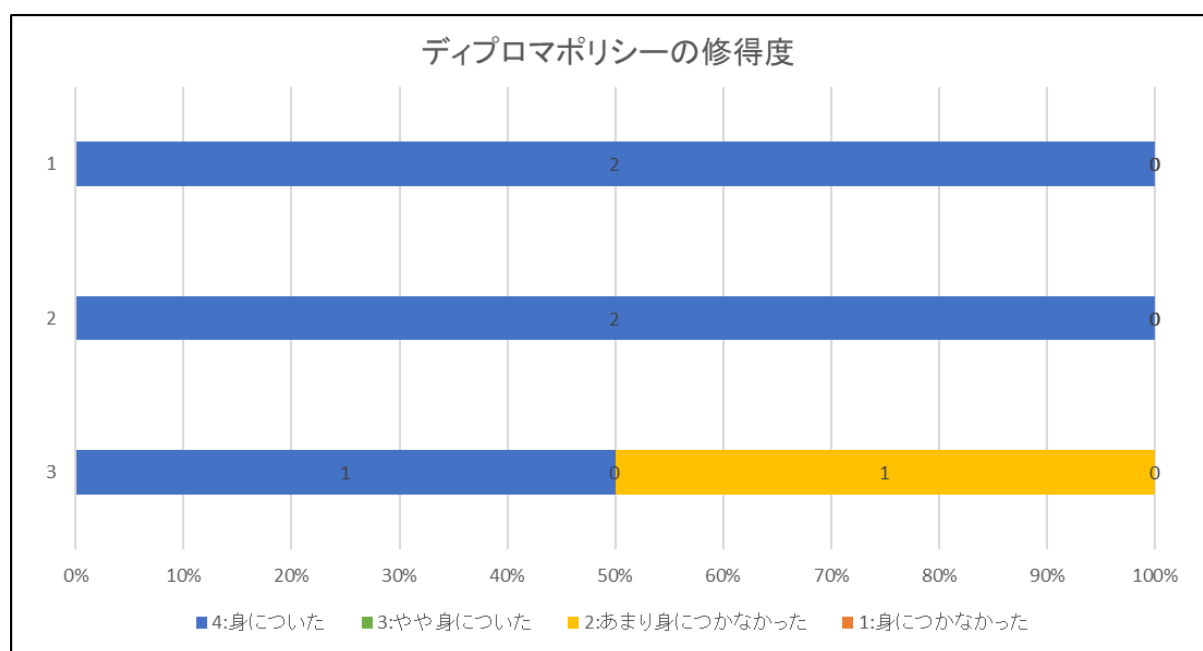
1. 機械システム工学分野修了生の業種別回答者数

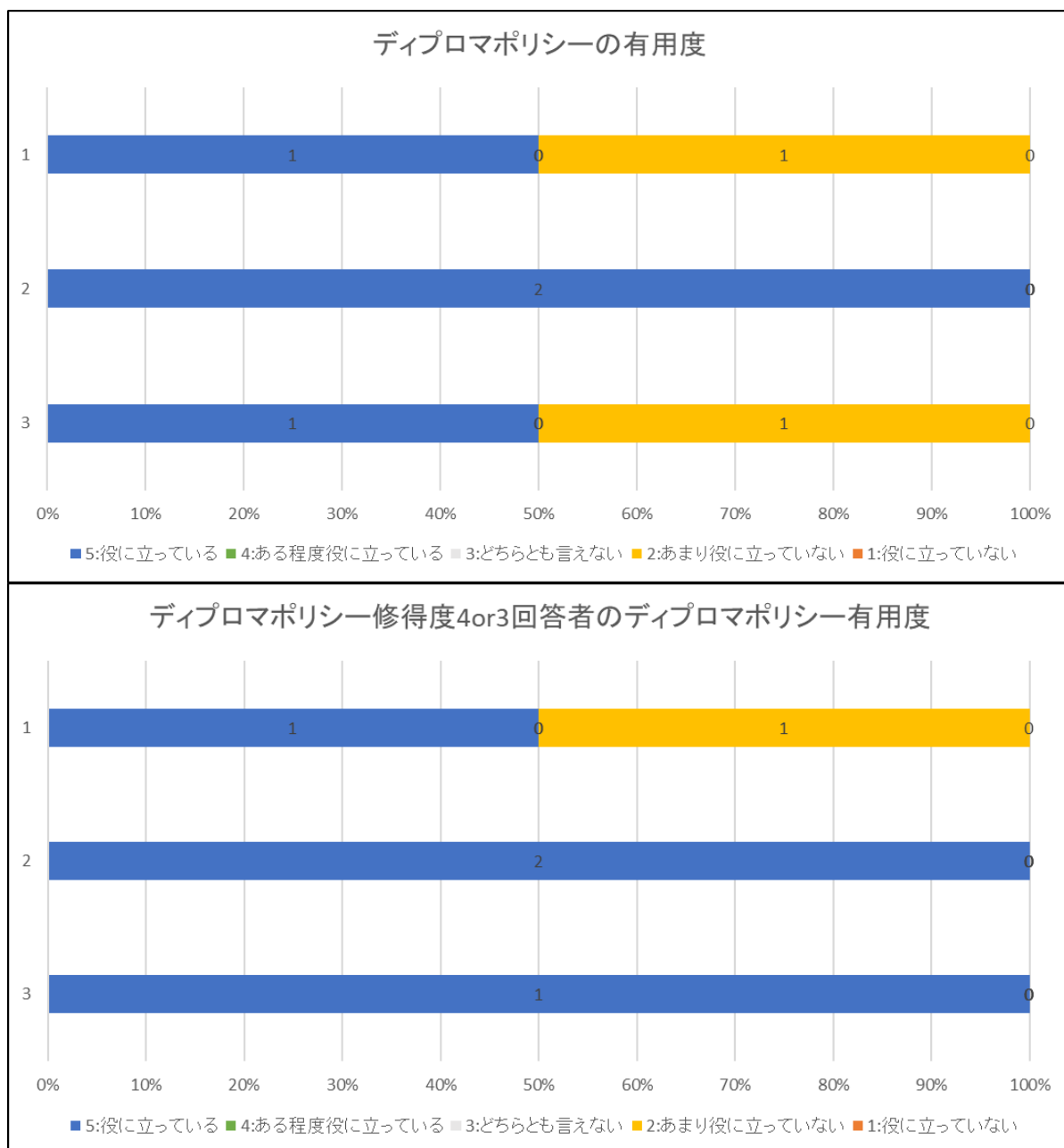
業種 No	業種名	回答数	割合
10	輸送用機械器具製造業	2	100.0%
Total		2	100.0%

2. 工学研究科全体のディプロマポリシー

1	工学分野の高度専門知識を修得して応用できる能力
2	自ら課題を探究し、その解決に向けて高度専門知識を活用し主体的に考える能力
3	研究開発を通じて必要となる日本語や英語によるコミュニケーション能力

3. 機械システム工学分野修了生のアンケート結果





4. 機械システム工学分野のアンケート結果の評価

修了生の回答数が少ないが、機械設計システム工学分野の目指している業種に就職していることが伺える。ディプロマポリシーの修得度については概ね「身についた」との回答であり、工学分野の高度専門知識を修得し応用できる能力や課題探求能力を身に付けていると評価する。有用度については「自ら課題を探求し、その解決に向けて高度専門知識を活用し主体的に考える能力」について役立っているとの回答を得ているものの、「工学分野の高度専門知識を修得して応用できる能力」と「研究開発を通じて必要となる日本語や英語によるコミュニケーション能力」については、あまり役立っていないとの意見も見られた。

●電子物理工学分野

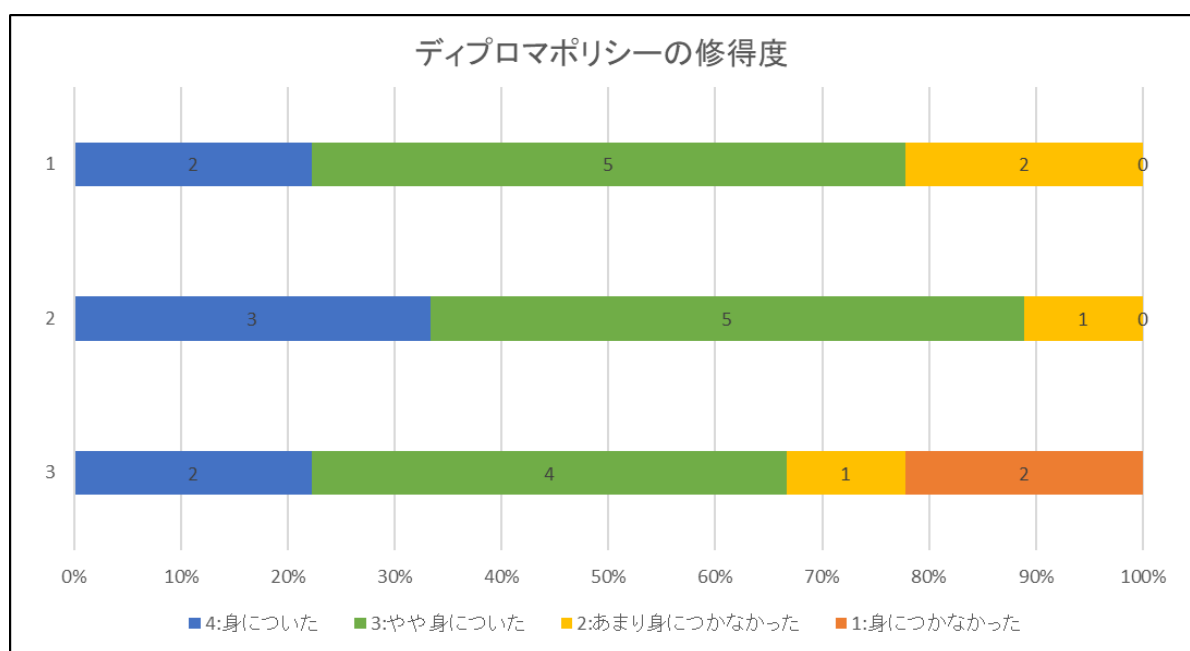
1. 電子物理工学分野修了生の業種別回答者数

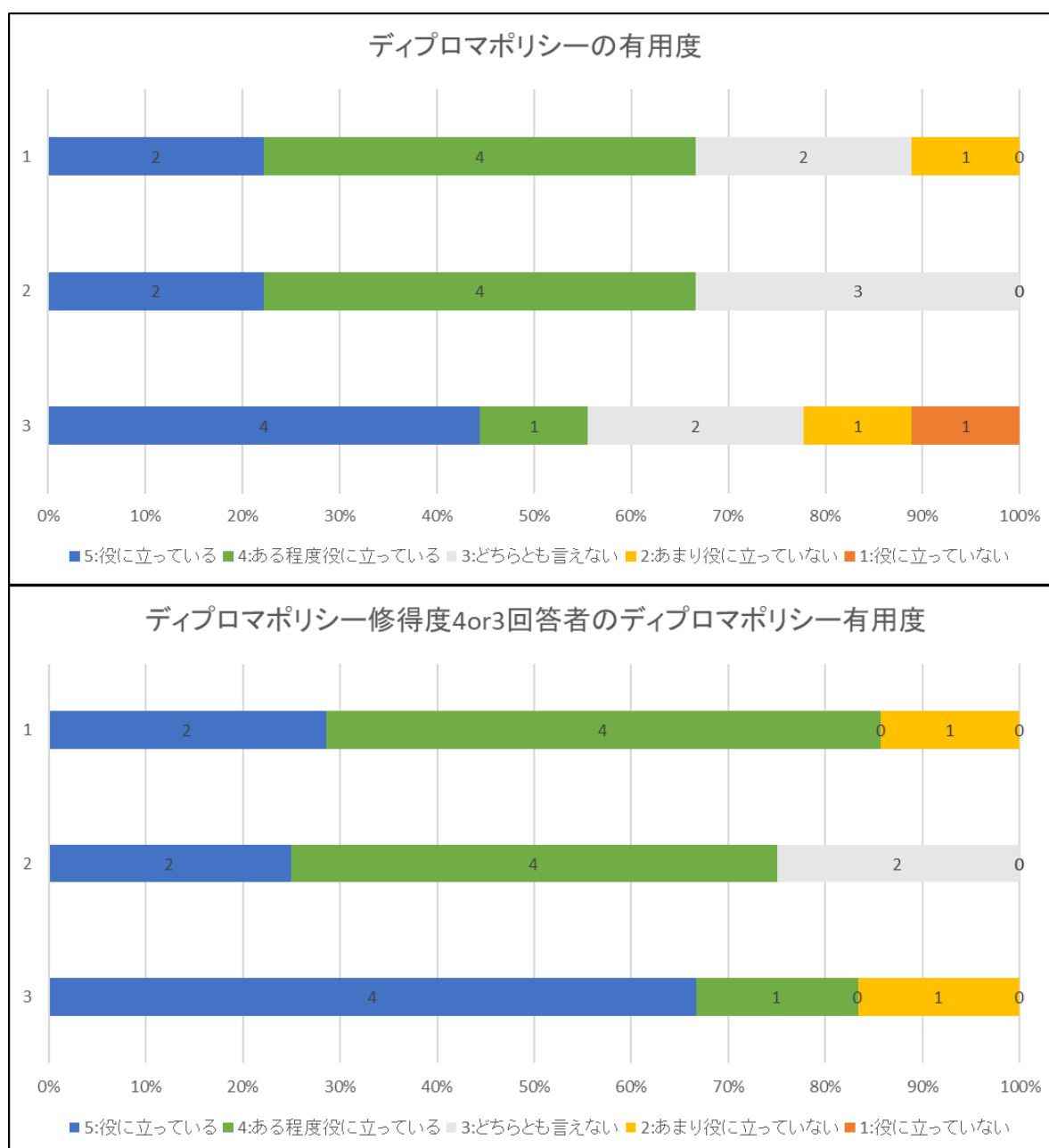
業種 No	業種名	回答数	割合
6	鉄鋼業、非鉄金属・金属製品製造業	2	22.2%
8	電子部品・デバイス・電子回路製造業	4	44.4%
11	その他の製造業	1	11.1%
12	電気・ガス・熱供給・水道業	2	22.2%
Total		9	100.0%

2. 工学研究科全体のディプロマポリシー

1	工学分野の高度専門知識を修得して応用できる能力
2	自ら課題を探究し、その解決に向けて高度専門知識を活用し主体的に考える能力
3	研究開発を通じて必要となる日本語や英語によるコミュニケーション能力

3. 電子物理工学分野修了生のアンケート結果





4. 電子物理工学分野のアンケート結果の評価

1) 修了生の業種から見た評価

修了生 9 名からの回答があった。電子物理分野の目指している業種に就職していると判断できる。

2) ディプロマポリシーについて

- ・項目 2（自ら課題を探究し、その解決に向けて高度専門知識を活用し主体的に考える能力）については、9 割近くが修得できたと判断している。
- ・一方、項目 3（研究開発を通じて必要となる日本語や英語によるコミュニケーション能力）については、3 割以上が修得できていないという判断であった。
- ・有用度においては、項目 3 の有用度が低かった。これは英語が必要な職業についている修了生が少なかったためと考えられる。

●電気システム工学分野

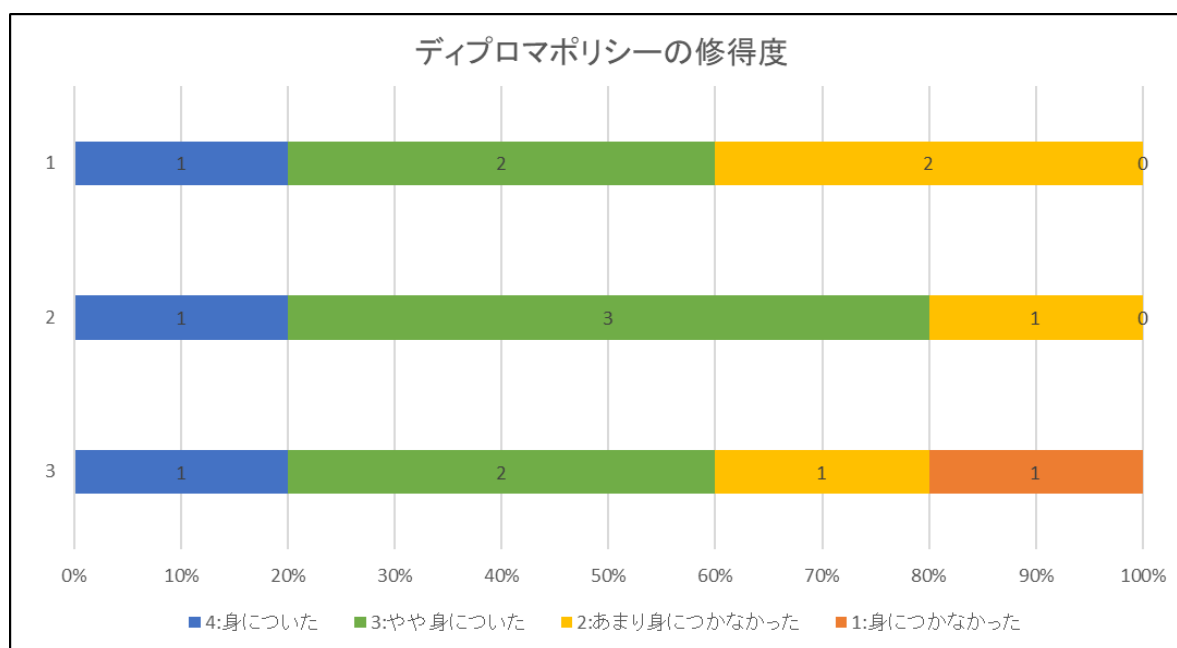
1. 電気システム工学分野修了生の業種別回答者数

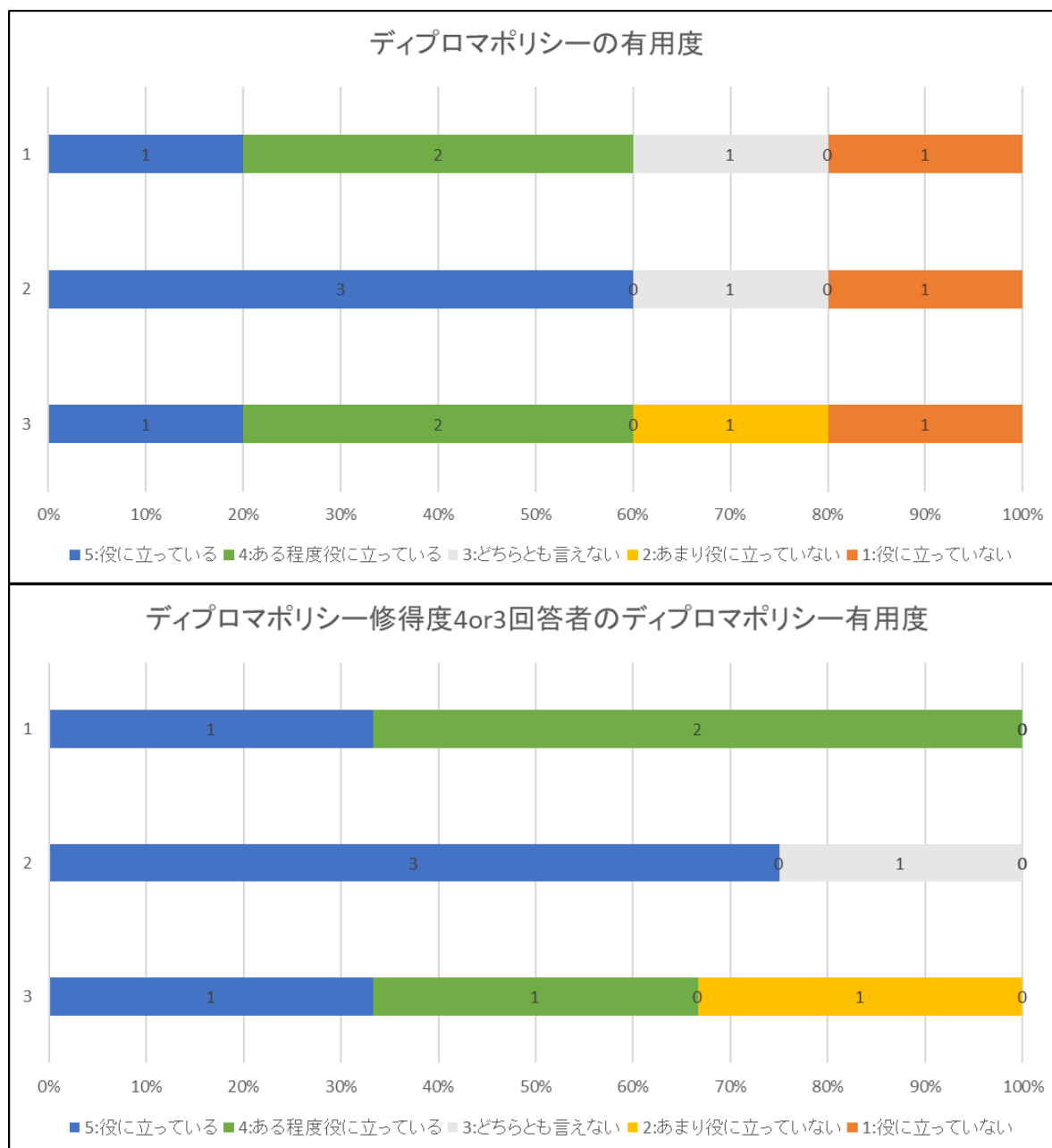
業種 No	業種名	回答数	割合
9	電気・情報通信機械器具製造業	1	20.0%
12	電気・ガス・熱供給・水道業	1	20.0%
13	情報通信業	1	20.0%
24	その他	2	40.0%
Total		5	100.0%

2. 工学研究科全体のディプロマポリシー

1	工学分野の高度専門知識を修得して応用できる能力
2	自ら課題を探究し、その解決に向けて高度専門知識を活用し主体的に考える能力
3	研究開発を通じて必要となる日本語や英語によるコミュニケーション能力

3. 電気システム工学分野修了生のアンケート結果





4. 電気システム工学分野のアンケート結果の評価

1) 修了生の業種から見た評価

回答者数が少ないが、(別途、就職先を調査した結果) 修了生は半導体作製企業、電気通信情報起業、電力会社、電気機器製造企業であるが、特に、電気・ガス・熱供給・水道業が多い。例年の傾向である。

2) ディプロマポリシーの習得度について

3つのディプロマポリシーにおいて、概ね肯定的な回答となっている。例年、日本語や英語によるコミュニケーション能力については、あまり身につかなかったとの回答がある。これは、英語によるコミュニケーション能力についての修了生の評価と考える。入学時から英語を苦手とする学生が多いことが大きな要因と思われるが、英語文献の読み合わせの時間を特別に設けるなどの工夫をしているものの大きな成果が得られていないことが反映されていると考える。

3) ディプロマポリシーの有用度について

3つのディプロマポリシーにおいて、多くが肯定的に回答している。

以上の結果から、修了生は概ね工学専攻が掲げたディプロマポリシーを身につけていると考える。

●情報システム工学分野

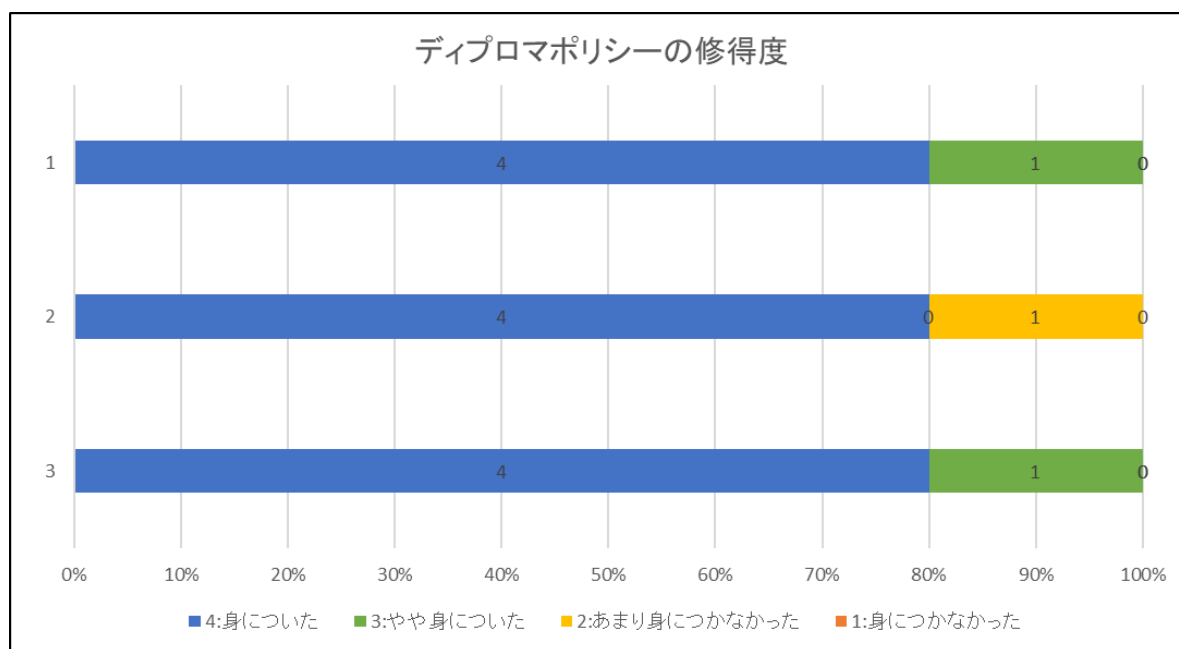
1. 情報システム工学分野修了生の業種別回答者数

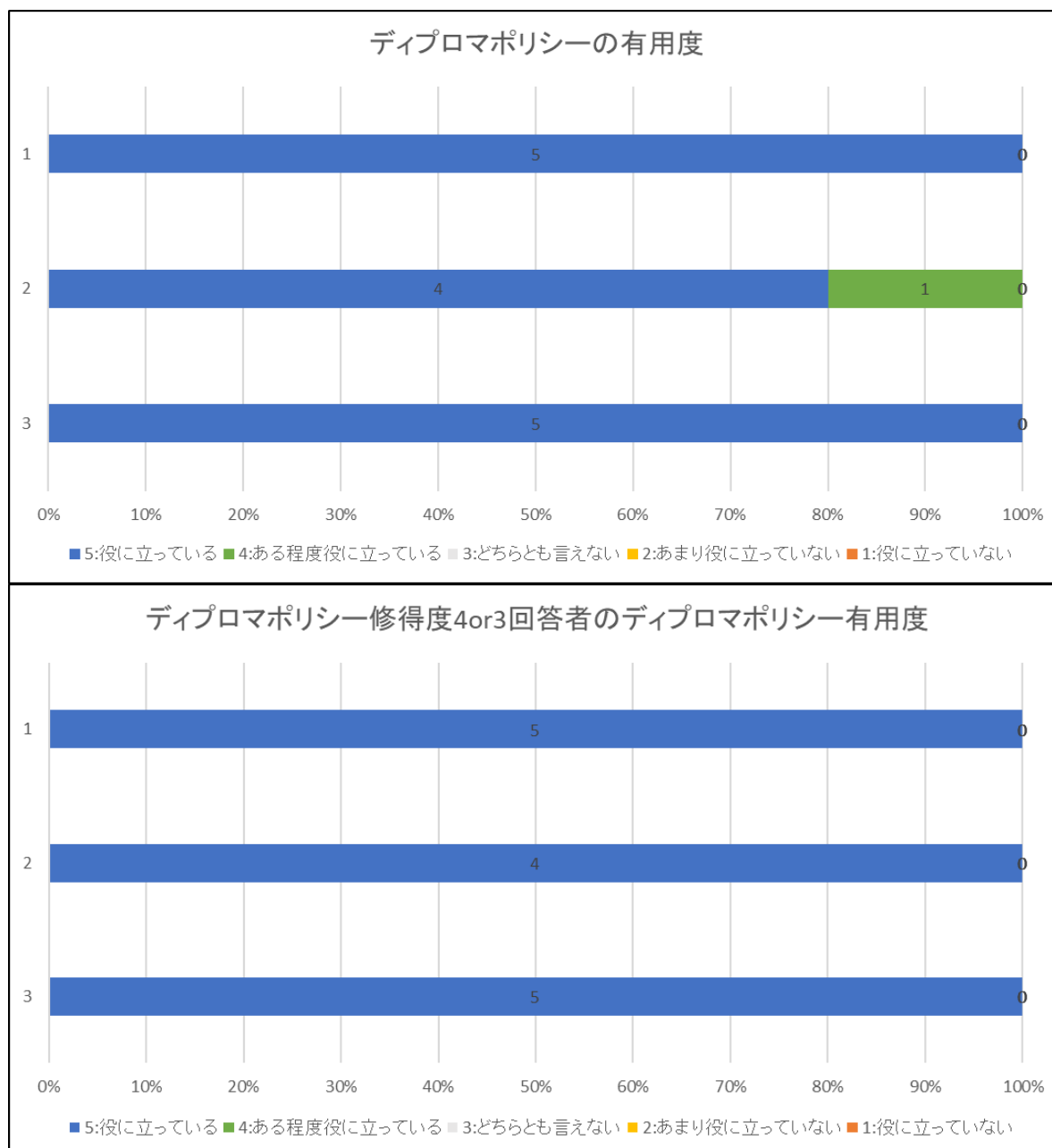
業種 No	業種名	回答数	割合
8	電子部品・デバイス・電子回路製造業	1	20.0%
13	情報通信業	4	80.0%
Total		5	100.0%

2. 工学研究科全体のディプロマポリシー

1	工学分野の高度専門知識を修得して応用できる能力
2	自ら課題を探究し、その解決に向けて高度専門知識を活用し主体的に考える能力
3	研究開発を通じて必要となる日本語や英語によるコミュニケーション能力

3. 情報システム工学分野修了生のアンケート結果





4. 情報システム工学分野のアンケート結果の評価

1) 修了生の業種から見た評価

アンケート回答者は5名と少ないが、4名が情報通信業で働いており、残る1名も本分野の目指している分野（電子部品・デバイス・電子回路製造業）である。このことから、分野のカリキュラム設計方針については、特に問題はないと考えられる。

2) ディプロマポリシーについて

すべてのディプロマポリシーについて、修得度では「身についた」、有用度では「役に立っている」の回答がほとんどであり、アンケートに回答した学生については、本分野が修得を目指している能力を身につけ、それを職場で活かしているとしていると判断できる。

以上から、現在の情報システム工学分野のカリキュラム設計には、特に問題はないと考えられる。